

and 考

佐々部 英男

and conjunction

The particle by which sentences or terms are joined, which it is not easy to explain by any synonymous word.

Johnson's Dictionary

『英文学評論』もついに五十集に達した。第一集が一九五四年であるから本年すなわち一九八四年は三十年目に当たる。一世代経たわけだが、その間教養英語教育にたずさわってきた筆者が痛感するのは、学生の *and* にたいする理解不足であった。もっともこれに気づいたのは筆者が最初ではなく、一九一二年出版の市河三喜『英文法研究』にも「注意すべき *and* の用法」と題する一章がある。市河博士は主に *nice and warm = nicely warm* といった *hendriady's* 的用法に注意しておられるが、本稿では教室で学生が実際につまづいた例から始めて、英語史あるいはシンタックスあるいは文体といった視点から *and* を眺めるつもりである。但し眺めるだけであって、掘り下げるには至らなかったことを、あらかじめお断りしておく。

The skipper thrust his hand into one of his trouser pockets and with difficulty, for they were not at the sides but in front and he was a portly man, pulled out a large silver watch.

Maugham, *Red*

船長はズボンの片方のポケットに手をつっこんだ。しかも大儀そうに、というのはポケットはズボンの脇ではなく前にある上、彼はでっぶりした男だった。そして大きな銀製の懐中時計をひっぱりだした。

『赤毛』の書き出しでモームが意図したのは、かつてはアポロの神にもたとえられた美青年を、二十五年の年月の間に、見分けがつかぬほど醜悪にふくれあがった船長として登場させることであった。中年男の肥満といえばまず突きだした太鼓腹だが、モームは時計をとりだすという動作によって、巧みに太鼓腹を描いている。この場合、仮に *and* がなくても、というよりはないう方が、学校文法に親しんだ学生には分かりやすい。しかし *and* をはさむことによつて、いわば意味の流れに歯止めをかけ、如何にも大儀そうな様子が浮かび上がってくると思われる。このような *and* の呼吸を会得するには、学校文法や初歩的な辞書では不十分であろう。

不十分といえ、冒頭に引用したジョンソン博士の定義「如何なる同義語で説明するのも容易ではない」も極めて不十分といえる。ジョンソンは一七五五年というところで納得できるとしても、略二百三十年後の *The Oxford Guide to the English Language* に収められた Hawkins 氏の辞書でも *and conj. connecting words, phrases,*

or sentences という説明で片付けられているのは、如何にも物足りない。もっとも日常限らないコンテキストで and を使っている本国人にとっては、この程度の説明でも差し支えないであろうが、外国人には明らかに不十分である。英語教育の始めに、and といえは「と、そして、すると」と覚えこみ、とかく対等の語、句、節を結びつける接続詞とつけとる学生のどれだけが、それぞれのコンテキストで and を考え、研究社や岩波の『大英和』といった辞書で and の意味を確かめるであろうか。

とかく対等の語、句を結びつける接続詞とつけとる傾向は次の例にも見られる。

Nearly a year later, in the month of October 18—, London was startled by a crime of singular ferocity, and rendered all the more notable by the high position of the victim.

Stevenson, *Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde.*

およそ一年後の一八——年十月、ロンドンには異常に残酷で、しかも犠牲者の高い社会的地位のために一層注目を浴びた、犯罪事件に愕然とした。

ある学生は London was startled … and rendered と理解しちうとして、当然ながら失敗した。

二

and は必ずしも対等でない語句を結びつけるばかりでなく、一見並列しているかに見える and … and も必ずしもそうでない場合がある。

She was glad to see him when he came, and he came frequently, generally from five till seven, and sorry when he went away.

Maugham, *Appearance and Reality*

彼女は彼がやってくる時——ひんばんに、大体五時から七時にかけてだが——喜んで迎え、立ち去る時には名残りを惜しんだ。

glad...and sorry の and は he came, and he..., の and の違ふは明白である。

三

もう一つ學生が十分には把握してゐなうと思われるのは、前後を密接に結びつた and である。

Don't drink and drive. あなた You cannot eat your cake and have it. あなた 例は問題ならぬが、次のような長い文章ではいひどおさないか。

The tragedy of love is not death or separation... Oh, it is dreadfully bitter to look at a woman whom you have loved with all your heart and soul, so that you felt you could not bear to let her out of your sight, and realise that you would not mind if you never saw her again. The tragedy of love is indifference.

Maugham, *Red*

愛の悲劇は死でも別離でもなし。……かつては精魂を傾けて愛し、その姿を見失うことには堪えられぬとまで感じた女性を目にして、二度と会わなくても構わないと悟るのは、恐ろしくつらいことだ。愛の悲劇は無関心になることだ。

四

以上の例は要するに and の柔軟性を示すとらえるであらうが、この点を英語史全体について眺めてみたい。まず注目されるのが and の風の長短で、とくに but と but² と著しう。 *The Oxford Dictionary of English Etymology* にある「しかし」と訳られる but の adversative conjunction 的用法は十三世紀からである。とりとて *OED* はそれ以前の例として *The Anglo-Saxon Chronicle (the Parker MS)* 八九七年の項を引用している。デン人の船に対抗してアルフレッド王が建造させた軍艦についての記事であるが、

Næron nawðer ne on Fresisc gesceþene ne on Denisc, buton swa him selfum ðuhte þæt hie
nytwyriðoste beon meahen.

(それらの船は) フリースランド式でもデンマーク式でもなくて、最も役立つと彼自身に思われるように造られていた。

ただしこの but (*buton*) は日本語の「つ」と訳するのが適切で、多くの注釈書は conj. but としている。ただし *Sweet's Anglo-Saxon Reader* はこの箇所をゴロッサリを取り上げておらず、収められているすべてのテキストの and に代らう conj. と同じに unless と except that の解釈しか示していない。筆者自身はこの箇所も except that の意味とされるように思う。 *OED* が次に挙げているのが一三〇〇年頃の *Cursor Mundi* であるのは、こ

の種の語の例としては離れ過ぎており、*MED* は *but* *ga* で一二二五年頃の例を初例としている。いずれにしても *OE* と *early ME* では、*conj.* と *conj.* の *but* ではなく *unless* か *except that* の意味で、*adversative conjunction* としては *ac* が普通に使われた。

これにたいし *and* は英語はかりでなくゲルマン諸語に共通である。語源についても比較的近年通説がくつがえされたようであるが、たち入る準備はない。ただし *and* を考える上で、*and* の語源をどう捉えるかは大切な問題であらう。

英語史では七世期末と推定される最古の詩 *Cædmon's Hymn* (The Moore MS) の二行目に、

metudæs maecti end his modgidanc

主の力と御ころ

として *and* が始めて現れる。つづりにつづけてつけ加えれば、*u* といった鼻音の前で *a* が *o* となるのは珍しくなく、*OE* では *and*, *ond* *and* *end*, *ME* では *and*, *andd*, *hand*, *ant* として *an*, *on*, *a* が見られる。ラテン語では「*and* にならうて」でもよく表わされた。

五

息の長さとともに注目されるのは、英語史の最初から、文学作品ではあるいは現代英語以上かと思われるほど、頻度の高いことである。

現存する約三万行の OE 詩について、*A Grouped Frequency Word-list of Anglo-Saxon Poetry* は頻度の高き順に語を列挙しているが、(1) pers. and poss. pron. ic, þu, he (15974) (2) dem. pron., def. art. se, sio, þæt (10458) (3) and (5001) (4) on, in (4747) (5) sbst. vb. wesan (4189) となっている。括弧内の数字は使用度数であるが、(1)と(2)はごくつかの變化形の合計であり、単独の語としては and が一番多い。よら新編 *A Concordance to The Anglo-Saxon Poetic Records* によれば and (3208) ond (2048) となら on (4401) よら多い。

散文についてはこのような資料が手許になく、また文体ときり離して統計的数字を挙げてもあまり意味がないと思われる。

聖書の訳で and が多くなは OE 訳でも当然予想されるが、*The Anglo-Saxon Chronicle* によれば同様である。

865. Her sæl hæþen here on Tenet, and genamon friþ wip Cantwarum, and Cantware him feoh geheton wip þæm friþe; and under þæm friþe and þæm feoh-gehate se here hine on niht up bestæþ, and oferhergode ealle Cent eastwearde.

八六五年 この年異教徒の軍勢はサネット島を占拠し、そしてケントの人々と和ぼくしました、ケントの人々は和ぼくと引き換えに彼らに金品を約束した。しかも、和ぼくと、金品の約束の下で、その軍勢は夜ひそかに来襲し、そして、ケントの東部一帯を荒らしまわった。

三十八語の文章で and が五度使われている。散文の発達の初期の段階では、これはむしろ当然の現象であろう。compound sentence かつ complex sentence では、後者をつくる方が、文字どおり複雑と思われる。筆者の印象を裏づけるため、Mitchell 氏の文章を引用する。

Alfred and his companions were struggling to develop the language as a vehicle for the expression of complicated narrative and abstract thought. They achieved no little success, but had their failures too. The breathless but vigorous account of the Battle of Ashdown (the annal for 871 in the Parker MS of the Anglo-Saxon Chronicle), which sweeps us along on a surging current of simple sentences joined by *and*, is not untypical of the early efforts of prose writers who were not translating from Latin. There is only one complex sentence in the whole piece (the last but one).

complex sentence に必要な接続詞や関係詞が大方英語史の過程で発達したのにたいし、英語散文発達史では「初めに *and* ものぞ」といふのである。

六

しかし *and* の多用は、英語発達の過程という視点からだけ眺めるのも問題がある。OE 末期一〇一四年ウルフスタン大僧正の英国民に与えた説教の次の一節では、*and* が *purh* (through) とともに、技巧的にくり返されてゐる。

... ac wearð þes þeodscipe, swa hit þincan mæg, swyþe forsyngod þurh mæningfælde synna and þurh feła misdæda : þurh morðdæda and þurh mandæda, þurh gitsunga and þurh gifernessa, þurh stala and þurh strudunga, þurh mannsylena and þurh hæþene unsida, þurh swicdomas and þurh searacraftas, þurh labbycas and þurh æswicas, þurh mægtræsas and þurh manslyhtas, þurh haddrycas and þurh

æwþycas, þurh siblegru and þurh mistlice forligru.

しかししてこの国民は察せられるごとく、様々な罪と多くの非行によって大いなる罪を犯した。すなわち大罪と犯罪によって、強欲とどん欲によって、盗みと略奪によって、人身売買と異教の迷信によって、裏切りと奸計によって、法律違反と破戒によって、近親殺害と殺人によって、聖職者冒とくと姦淫によって、近親姦と様々な邪淫によって。

原文では *and* が名詞ばかりではなく、*þurh* も対にして結んでおり、この *and* の使い方はきわめて意図的である。
No.

and とらった語を眺めるはあいにも、歴史的な視点とともに、個々の文体といった視点も必要になるであろう。ただし差当りては問題点の指摘にとり、歴史的な視点から early ME の例を一つ挙げておく。

Ich was in one sumere dale,

In one suþe diþeþe hale;

Iherde Ich holde grete tale

An hule *and* one niþingale.

Þat þrait was stiþ *an* starc *an* strong,

Sumwile softe *an* lud among;

An eiþer aþen oper swal

An let þat vuele mod ut al;

An eiþer seide of operes custre

and 兼

Pat alreworste pat hi wuste;

An hure an hure of operes songe

Hi holde plaiding supe stronge.

The Owl and the Nightingale, ll 1~12.

私が日当りのよい谷

大変ひそかな場所にいると、

ふくろうとナイチンゲールの

大口論が聞えてきた。

その論争ははげしくきびしくするまじく、

時には低く時には高く、

お互に腹一杯の

敵意を吐きだし、

お互の性について

知るかぎりの悪態をついた。

とりわけお互の歌について

大変さまざまな論争をした。

かつての拙訳を引用したのは、もちろん出来栄えのためではなく、逐語訳を意図しながらも、四行目のandをのぞいて、八回使われているand(イタリックのand)がすべて訳されていないためである。

and が an とつづられていても、F の意味ではない。四行目だけ and となっているのに特に意味があるかは明らかでないが、強勢が落ちるわけでもなく、発音の上でもおそろく d は省かれて、かろやかにくり返されている印象を受ける。

early ME は英語の連続性を考える上で重要だが、and のような語は強じんな生命力を保持し、頭韻詩から脚韻詩への移り変りに、いさなかも影響されなかったかに見える。

一 つ注意したいのは、and で結ばれ、OE に由来すると思われる句が三回 (sif an starc an strong, softe an Iud, hure an hure) 使われている点である。これも and の持つ強じんな生命力のためであろうか。

七

四では and のもつ柔軟性を指摘したが、OE についてもいくつかの例を挙げてみたい。

Ga ge on minne wingearð, and ic selle eow þæt riht biþ.

The Gospel of Saint Matthew, 20, 4

あなたがたは私のぶどう園に行きなさい。そうすれば私はあなた達に正当な報酬を与えるであろう。

Soplice manige sind geclypode, and feawe gecorene.

op. cit., 20, 16

まことに呼ばれる者は多く、しかも、選ばれる者は少ない。

この箇所は欽定訳では「Many be called, but few chosen」となっている。and と but の境界が必ずしも明確でないのは、現代英語でも同様である。

his rice stent on mæppe and on mæppe.

Elfric, Catholic Homilies. pt 2, ch 33

彼の国は幾世代も、幾世代も、続くであらう。

Ða he ða longe ond longe hearpode, ða cleopode se hallwara cyning ...

King Alfred's Translation of Boethius

そこで彼（オルフェウス）が長くまた、長くたて琴をひいた時、冥府の人々の王が叫んだ。

このような例を見ると、八木林太郎氏が「OE」において既に今日の英語に見られる and の接続詞としての用法の大部分が見られる」とされたのは正しい。そしてその背後には and という語——それ自体としては無色透明に近く、前後の語句を結びつけるその結びつけ方次第で意味が変ってくる語——の性格もうかがわれる。ただし *OED* が示すように、今日では逆に廃れた用法、とりわけ *if* とか *even if* を意味する用法、があったことも事実である。

次に OE の *and* で忘れられない箇所を紹介したい。既に引用した「アングロサクソン年代記」で特に文体が注目されるのは七五五年の項であろう。Sweet の *Reader* では *Cynewulf and Cyneheard* と題して巻頭を飾っている。

755 Her Cynewulf benam Sigebryht his rices and Westseaxna wiotan for unryhtum dædum, buton Hamfunsce.

この年キョネウルフ(王)およびウエセックス評議会は、不正行為のために、シエブリヒトからハントシャを除く領地を没収した。

この年代の書き出しであるが、このあたりは前後の年代の英語と変っているわけではない。もっとも *and* につづく二番目の主語 *Westseaxna wiotan* の位置は注目に値する。現代英語でも *and* にみちびかれた主語が文末に付加されることはあるが、整った文章でこの場合のように文中におかれ更に二つの副詞句がつづくことはまずないであろう。更に動詞 *benam* は単数形で一番目の主語と一致している。この現象は OE ではごく普通であるが、*and* の付加的な機能が現代英語以上に強かったことをうかがわせる。*and* そのものの意味は OE も現代英語も大して違わないにしても、*and* にかかわるシンタックスとなると著しい変化がある。

ところでキョネウルフの記事(というよりは物語)を紹介しようとした意図は別にある。物語といったのは、こ

の年代では引用したような文章が少しつついた後に、年代記が書き記される以前から、語り伝えられてきたキエネウルフとキエネヘアルドの物語が、エピソードとして挿入されているからである。Sweet の *Reader* では第二、第三のパラグラフにあたり、前記シェフリヒトの兄弟キエネヘアルドが、ある女性のもとに通ってきた (on wile) キエネウルフ王を襲って殺害する場面と、後から駆けつけた王の家来による仇討ちの場面から成る。このエピソードはしばしば *The English Saga* ともいわれ、間接話法と直接話法が入りまじるといったように口語的な要素が推定されている。約三十行のエピソードで and (ond) にかんして興味深い箇所だけを引用する。

Ond þa on þæs wifes gebærum onfundon þæs cyninges þegnas þa unsihnesse, and þa þider urnon swa hwele swa þonne gearo wearp, and radost.

するとその女性の悲鳴を聞いて、(別棟にいた) 家来たちは騒ぎに気づき、用意が出来たかぎりの者はそちらに走っていった。しかも、出来るだけ早く。

問題は三番目の ond で、Sweet の *Reader* では 'This use of *ond* may be idiomatic' という注があり、Mitchell and Robinson : *A Guide to Old English* は 'they ran, whoever became ready and quickest, i.e. each ran to the king as quickly as he could get ready' と説明している。'may be idiomatic' という注はあまりはつきりしないが、付加的で口語的、文章で使うには多少問題のある and の使い方という印象を受ける。「年代記」の五つの写本のうち A だけに ond radost があり、B、C、D、E では省かれているのも、この ond の使い方とあるいは関係があるかもしれない。

次は翌日王の殺害の知らせを聞いて、後に残された家来たちが馬で現場にかけつけたくだりである。

Pa ridon he bider ..., ond pone æþeling on þære byrig metton þær se cyning ofslaegen læg — ond
pa gatu him to belocen hæfdon — ond pa þærto eodon.

そこで彼らはさかへかけつけ……王が斬り殺られて横たわる館でその若君(キユネハアルド)と遭遇し——門は彼らに閉
ぢられていたが——そこ(門きわ)までやっつきた。

問題は二番目の ond とされたところへ pa gatu him to belocen hæfdon である。belocen は厳密にいうとかんぬ
きをかけて立てこもった感じだが、him to の him (この場合複数) が外の敵を指すのか中の自分たちを指すのかは
はっきりしない。Sweet も Mitchell and Robinson も両方の可能性を認めている。はっきりしているのは、
ond … belocen hæfdon の主語が表れていないにもかかわらず、前後の主語、キユネウルフ王の家来ではなく、
キユネハアルドとその家来を指すことである。このあたりにもこのエピソードの口誦的性格がでていいるのかも知
れない。

九

口誦的といえは OE 詩の成立には oral formula が大きな役割を果したといわれる。oral にこだわる必要はな
いという説もあるが、ともかく OE 詩で定型句が目立つことはたしかである。ところで定型句には and によ
って成立したものがかなりある。

例えば brad and bruneg (中はく輝くやがはぎを持つ) という and と頭韻で結ばれた句は Beowulf で
Grendel の母親が抜いた seax (一種の短剣) を形容しているが、OE 末期の作 *The Battle of Maldon* でイギリス

ス方の大将 *Byrhnōð* の刀にも使われている。

またアングロサクソン時代には脚の早い馬が現代の乗用車に匹敵したが、*meath ond maðum* (馬と脚) という句は、*Beowulf* で三回使われている他、格言詞 *The Maxims I* にも一例ある。

動詞句としては愛の表現として、*clippe and cysse* (抱きしめくさす) という句があり、*The Wanderer* 以来一五世紀まで続いていることはかつて紹介したが、その後の句が 'Joyce of Ulysses' と 'clip and kiss' という二つ使われているのを知った。したがって、意識的にではあるが、この句は千年以上にわたる formula ということになる。

以上の三例では formula の一端にしかふれることはできないうが、formula であっても、必ずしも formula ではなくても、and によって同じ品詞の語を結びつけるのは比較的容易であり、OE 詩の作者には便利な表現手段であったに違いない。更に、and は強弱ストレスによる OE 詩のリズムにも関係する。

Héorogar ond Hrōðgar ond Hálga til

Beowulf 1. 61

へオロガールとフロースガールと善民なるハールガ

Klaeber による三番目の個有名詞にだけ形容辞を加えるこの表現形式は Homer 以来よく見られる。

うんぐい Bolton は *Beowulf* は *and* (*Beowulf* では *and*) に代って、次のような指摘をしている。

In the 3,182 lines of *Beowulf*, the conjunction *ond* appears 311 times, roughly once in every ten lines. Often it joins words ... instead of clauses—so in thirty of the first thirty-one (ten per cent.) of the

uses of *and* it joins adjectives, nouns, complementary infinitives, and (in compound predicates) finite verbs. すなわち語の接続詞としての用法がほとんどで、主語を含む節の接続詞としての *and* は極めて少なく、散文とは対照的であることがわかる。

散文でもビードの「英国国民教会史」の OE 訳ではラテン語の一語を *and* で結ばれた二語で訳す傾向が見られ、更に ME ではゲルマン系とラテン系の同義語を *and* でつなぐという風に、*and* による表現の可能性は様々である。

十

OE と現代英語との違いは、*and* そのものよりも *and* にかかわるシンタックスで大きいと七でのべたが、この点をもう少し眺めてみよう。現代英語では *Two and two equals four* か *equal four* かは *あつとつこゝろだが*、OE では集合名詞がまず単数の動詞をとり *and* の後で複数形になることが多い。

And by ilcan gearre com feorþe healf hund scipa on Temesemūpan, and bræcon Cantwaraburg and Lundenburg, and gefliemdon Beorhtwulf Mierca cyning mid his ferde, and foron þa sup ofer Temese on Suprige. And him gefeahþ wif Aþelwulf cyning and Aþelbeard his sunu æt Ac-lea mid West-seaxna ferde, and þær þær mæste wæl geslogon on hæpnum herige þe we secgan hierdon oþ þisne andwardan dæg, and þær sige namon.

The Anglo-Saxon Chronicle

この同じ年（八五一年）に三百五十艘の船がテムズ河にやって来て、カンタベリ市とロンドン市を襲い、マーシャの王ベオルフトゥルフを軍勢とともに退散させ、そして南へテムズ河を渡ってサリへ行った。すると彼らにたいしてアゼルウルフ王と息子アゼルベアルドがウエセックスの軍勢とともにオークリ（不詳）で戦い、異教の軍勢に今日までに我々が聞きおよんだ最大の殺りくを行い、そこで勝利を収めた。

いぢぢか長くなつたが動詞を列挙するに、com (単数) braecon (複) gefiendon (複) foron (複) gefaht (単) geslogon (複) hierdon (複) namon (複) となる。二番目の文で動詞 gefaht が単数で始まつたのは and の前の単数の主語と一致したためであろう。このような不統一はもっと洗練された Ælfric の文章にも見られる。

se flohere ferde eft to scipe and behyddan þæt heafod

Ælfric: *Lives of Saints*

海賊たちは船に戻つてその首をかくした。

語尾の脱落や類推によって過去の単数形と複数形が統一された後の英語では解消した現象なので、われわれには捉えにくい特別な理由があつたのかも知れないが不明である。次の例では and の後で現在形が三人称から一人称に変わっているが、この場合は後期ローマ皇帝以来の書簡体の書き出しにもとづくといわれる^④。

Ælfréd kyning hatēð gretan Wærfērð biscep his wordum lufice ond freondlice; ond ðe cyðan hate
ðæt me ...

Cura Pastoralis

アルフレッド王はウォルフェルス僧正に自らの言葉で親愛の情をもちてあいなつすることを命じ、そして「予は」なんじに以下のことを知らせるよう命ずる。

Ælfrēd … hated … Werferð … his といつた三人称の固い調子が and の後では ic (I) を表われていないが hate … ðe … me といふより直接相手に訴える調子に変わっている。なお hated, hate の直接目的語は省かれていぬ。cf. send for a doctor.

動詞の位置に *gōd* Mitchell 氏にちなむ。S … V の語順は従属節および ond と ac の後で「most common」といふことである。

語順に *gōd* þu goda þeow and getreowa, *The Gospel of Matthew*, 25, 23 (なじむ善良なるしもむにて忠実なる) といふた adj+n+and+adj ないく普通にもある。今日でも good men and true は残つてゐるが、他の形容詞でも OE, ME では普通であった。ME では不定冠詞まで形容詞に付随して繰り返されることもあるが、むしろ近代の作家が古風な感じをだすために、この語順を利用した例を挙げておく。

'I am a good knight and noble…'

Scott, *Ivanhoe*, ch. 43

Graham Tulloch: *The Language of Walter Scott* は他の作品からの四例を挙ち 'the purpose of Scott's examples is to contribute to the sense of archaism' といふことである。

十一

and についての愚考も原稿用紙では二十九枚目になった。二十九という数字はチヨースアの巡礼を連想させるが、これまた ‘nyne and twenty’ で and が登場する。そして最初に登場する騎士についての一行目も同様である。

A Knyght ther was, and that a worthy man.

一人の騎士がいた、しかも立派な男だった。

チヨースアの and にしつては G. H. Roscow : *Syntax and Style in Chaucer* (1981) が論じているので、もう一つ忘れがたい一例にとどめる。

“Sire Nonnes Preest”, oure Hooste seide anon,

“I-blessed be thy breche, and every stoon!

大変露骨な例で恐縮だが、重心はもちろん and の後にあると思う。 nine and twenty とかんれんして次の一行も別の意味で忘れ難い。

Then come kiss me, sweet and twenty.

Twelfth Night, 2, 3.

シェイクスピアと and としえは、*Macbeth* の独白を屈し起こすのは、筆者だけではならずである。*The Century Dictionary* が and の例として挙げているのも偶然ではなからう。

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,

Creeps in this petty pace from day to day,

To the last syllable of recorded time ...

Macbeth, 5. 5.

本稿は昭和五十八年十二月十二日徳島大学での講演を骨子とし、大幅に書き改めたものである。

注

- ① Mitchell and Robinson : *A Guide to Old English*, p. 58.
- ② 英文法シリーズ17 「副詞・接続詞・間投詞」 p. 41.
- ③ 『英文学評論』二十三集
- ④ The Bodley Head 版 p. 44.
- ⑤ Klaeber (ed.) *Beowulf*, p. 128.
- ⑥ Wrenn : *A Study of Old English Literature*, p. 199.
- ⑦ *Op. cit.* p. 61.